



瀬田東文化振興会
ビジョン
学区民が、文化活動を通じて、豊かな感性が生まれ、生活における精神的豊かさが実現できる活動をする

滋賀県大津市瀬田東文化振興会の情報はHP 瀬田東文化振興会を検索ください

栗津湖底遺跡は琵琶湖から瀬田川に名を変える付近の水深2〜3mの湖底にあります。地元の漁師らが貝殻や獣骨を引き上げたことからその存在が知られ、昭和二十七年、歴史地理学者の藤岡謙二郎氏によって調査され、当時は水が透明で船上からの観察と素潜りで範囲確認や遺物採取が行われ、平成二年度から本格的な発掘調査が行われました。

調査の結果、縄文時代早期(約10000年前)の川の跡からクリをはじめとする大量の植物遺体の集積や縄文時代中期前半(約5000年前)の貝塚等が見つかりました。この貝塚はセタシジミが主体で、淡水の貝塚としては日本最大の規模です。新鮮な湖水により酸素が遮断され、貝塚の大量の貝殻によって土壌が酸性に傾かなかつたことから、通常、陸上の日本の土壌では腐敗・乾燥して失われてしまう有機物(木の実などの植物遺体や骨などの動物遺体)がとても良い状態で遺っていました。

縄文時代のタイムカプセル「栗津湖底遺跡」(一)
財団法人滋賀県文化財保護協会 小竹 志織



イノシシ・シカの骨類
写真提供: 滋賀県



栗津湖底遺跡全景

QRコードをスマートフォンで検索すると、ホマホマ解読し、ホマホマ詳しくわかります。
Image of QR code

瀬田東文化振興会では、幼少年期に様々な体験活動を通じて、しっかりと学びの芽を育てることを目的とし、東学区の保、幼、小、小Pと協力し活動をしています。応援よろしく

昭和五十六年(1981年)三月当地に引越して来た。宅地は、通称「どんぐり山」と呼ばれている丘陵地の一角にあり、その斜面の一部が宅地化されたところであった。当時京滋バイパス開通工事に伴い「どんぐり山」の南西部の古代窯や灰原の発掘調査が多くの人たちによって実施されていた。その部分が「山ノ神遺跡」と命名され今日に至っている。「山ノ神遺跡」の頂上部には、工房跡も発掘されていたらしいが、作業は既に終了し更地になっていた。一時期その頂上部に地主さんを含む老人会が「ゲートボール場」を造られたが地域から距離もあり、間もなく使われなくなった。ただ、休憩場所としての東屋や登る道等玄人(くろうと)の作りで新聞にも掲載された程の立派なものであった。一方頂上部から裾にかけての広大な土地は、その昔茶畑だったらしいが、当時は高さ一メートル強の竹藪であり、夏の藪蚊には大変困った。その広大な土地も平成十七年(2005年)頃、整地され貸農園となったため、近隣の同世代の人数名が野菜作りを楽しむとともに親睦を深めてきた。この間、昭和六十二年(1998年)京滋バイパス開通後も続いて発掘調査はされていたが四号窯から「鷗尾」四体が発掘され国の重要文化

財に指定された。又、「山ノ神遺跡」も近隣遺跡と共に「瀬田丘陵生産遺跡群」として国の史跡に指定された。以後、「瀬田東文化振興会」の皆様により登り窯や鷗尾の復元、頂上部への「古代陶工房山ノ神」の建設更には周辺整備等活発な活動をされています。ただ、広大な土地でもありその管理は容易ではなく何とか将来はもつときれいに整備された遺跡になってほしいと願っています。最後に気候の良いときは、個人、団体問わず三組の見学者があり「古代陶工房山ノ神」の資料で勉強されています。ただ、最近建屋の中で「犬の糞」の放置、「たばこの吸い殻」の放置等マナーの悪化が見られます。東学区の貴重な財産としての「山ノ神遺跡」をきれいに維持し、多くの人に気持ちよく見学して頂きたいと思っています。

参考文献

「文化遺産オンライン」「鷗尾」

以上



現在の山ノ神遺跡(四号窯や鷗尾の復元)

瀬田東文化振興会だより(四八号)
発行日 二〇二〇年八月一日
編集人 吉居 紀生
発行所 瀬田東文化振興会
大津市一里山三丁目一六一
大津市瀬田東公民館内
〇七七―五四五―九〇〇―一
発行責任者 松田 文男



往時をしのぶ茶ノ木



往時をしのぶ登り道の石垣



当時の東屋の材料を使い乾燥小屋にリホーム(扁額が当時のしのはせる)

二、ふれあい四十七号で、お伝えしました、「地形ジオラマで拓く瀬田東の未来」をテーマに災害を想定した地形ジオラマによる身近なハザードマップの作製について、令和三年度の瀬田東学区三十周年記念事業(予定)として十月完成を目指して進めてまいりますので一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



一、令和二年度第三十回瀬田東学区文化祭中止決定のお知らせ
今秋の文化祭に向けての開催可否について、検討を重ねてきましたが、コロナ禍の情勢中「三密」をはじめ色々な制約ある状況下での開催は無理があるだろうとの結論に至りました。例年盛況の中で繰り広げられてきた地域の一大イベントの文化祭を中止せざるを得ないことは、誠に無念ではありますが、今年度は中止いたしますことお知らせ申し上げます。この決定に至りましたところをおくみ取りいただき、ご理解を賜りますと共に、今後とも一層のご支援をいただきますよう、よろしくごお願い申し上げます。

縄文時代のタイムカプセル

「粟津湖底遺跡」(二)



出土した大量の有機物は縄文人の食料の残り滓(かす)です。琵琶湖固有種のセタシジミを中心にイシガイ・タニシなどの貝類、フナ・コイ・ギギ・ナマズ・アユなどの魚類、スッポン、イノシシ・シカ・タヌキ・カモシカ・オオカミなどの動物、キジ・サギ・ハクチヨウなどの鳥類、トチノキ・ヒシ・イチイガシ・オニグルミなどの木の実類が確認されました。セタシジミやスッポンは現在よりも数段大きく、小さい個体は獲らない、大型獣では骨髄まで取り出して利用する様が見られます。

現地では貝殻だけの層、堅果類(けんかるい)の殻ばかりの層などが縞模様を成していたこと、また、貝塚を構成する大量のセタシジミの貝殻成長線の調査からは貝の死亡日が判り、捕獲された季節の傾向がつかめるなど、様々な分析調査から、粟津で暮らしていた縄文人が実に多種多様な動植物を季節的に利用していた実態が明らかになりました。初夏は魚を獲り、夏には貝を、秋に木の実を採って冬はイノシシなど動物を獲っていたという、年間の生業カレンダーがあった様子がわかってきました。狩猟採集民という人と獣を追いかけ、食うや食わずの暮らしを想像しがちですが、かなり計画的な収穫・漁獲などのスケジュールがあり、しかも摂取カロリーの大半はドングリなどの木の実類が占めていました。とりわけトチノキはアクが強く、食べるにはアルカリ成分を用いた高度なあく抜き技術が必要で、縄文中期初頭には、すでにこうした技術が確立していたことを示しています。

縄文時代のタイムカプセル

「粟津湖底遺跡」(三)



木の実や貝殻、獣骨などの自然遺物だけでなく、煮炊きを使う土器(中には修繕したものもあります!)、食料や素材の加工に使う石皿・磨石類(すりいし)、狩りや漁に使う石鏃(せきぞく)、石錘(せきすい)、骨角製の針やヤス、編籠(あみかご)や紐などの様々な道具類が見られます。また、土偶、ヒトの頭骨、漆を使った櫛(くし)や耳飾り、貝や骨、角、牙を加工した垂飾品(たれかざりひん)、腕輪などの装身具も出土しました。その素材は海産の貝類や琥珀など琵琶湖周辺では得られないものもあり、遠方との交流を物語っています。また、ヒョウタン、エゴマ、ササゲの仲間のマメ類など、植物の栽培が推測されるものもいくつかっており、縄文人の豊かな暮らしがうかがえます。また花粉分析等による環境復元からはその変化も読み取れます。クリ塚が形成された縄文早期の環境は、クリ、コナラなどの落葉広葉樹が広がり、今よりもやや冷涼な気候で、食料残滓(ざんし)から、クリ、オニグルミ、コナラ、ヒシなどを利用したことがわかります。一方、縄文中期の貝塚形成期には、常緑広葉樹のイチイガシなどのアカガシの仲間が主体の照葉樹林が広がる温暖な気候だったようです。食料残滓をみると早期に多かつたクリ、コナラ類は減り、イチイガシやトチノキの利用が増えており、環境の変化に対応しながら暮らしていたようです。縄文人の生きる智慧は今の私たちにも生きるヒントになるのかもしれない。調査は遺跡全体の一部分に過ぎず粟津の貝塚の大半は今も湖底に眠っています。



こはく

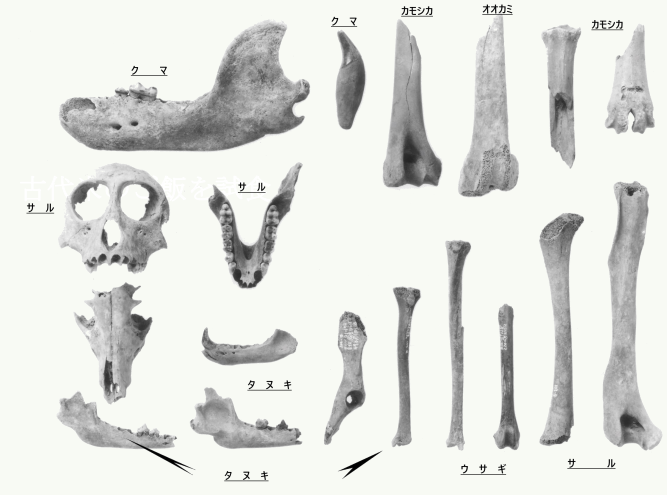


骨、角、貝殻類

写真提供：滋賀県

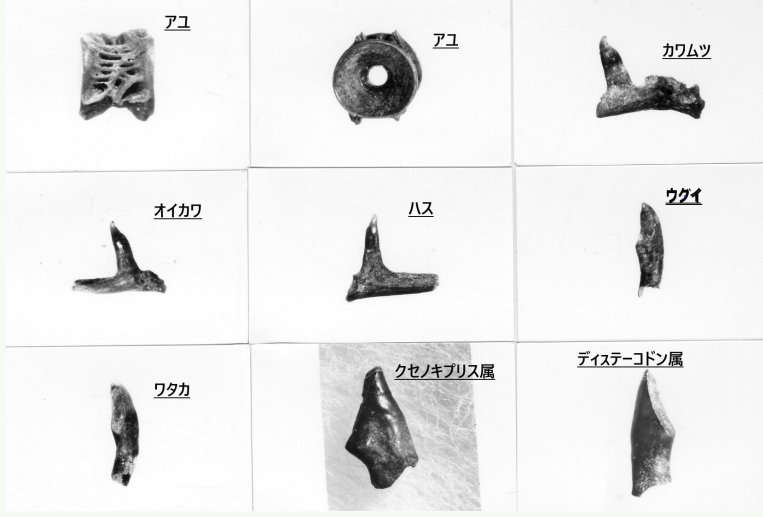


うるし製品



動物の骨

写真提供：滋賀県



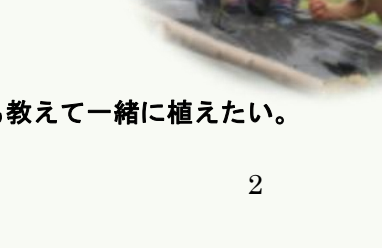
魚類椎骨・咽頭歯(アユ・バスほか)魚骨類



7月末から8月初めに稲の花が咲き始めます。

(連記)

【楽しみにしていた田植えがペットボトルに変身】六月三日(水)一里山ひかり保育園の新しい園庭で、文化振興会の中村ジイジさんに頂いた稲の苗を一緒に植えました。一人ひとつずつ稲を植える容器を用意し、植え方を教えていただきました。子どもたちが稲を手にした時は「これでお米が出来るの?」と不思議そうにする姿がたくさん見られました。それからいつでも稲が見られるように、園庭に置くことになりました。六月末、梅雨時期に入り、稲の苗はどうなったのか改めてしっかりと見ると稲が大きく沢山伸びていることに気が付き、大喜びの子どもたちでした。これからどう生長していくのか楽しみにしています。



・難しかったけれど楽しかった。

・休んでいたお友だちにも教えて一緒に植えたい。

コロナなんかには負けないぞ 一里山ひかり保育園 五月十五日(金)山ノ神遺跡で芋の苗植えをしました。今年はコロナウィルスの為、自粛期間中で少人数での参加だったが良い経験をさせて頂きありがとうございます。コツを教えてもらい、子どもたちも喜んで楽しく植えていました。また園でも教えてもらったことを子どもたちに伝えながら植えていきたいです。(連記)